

# 日本語学習者の作文における 〈語彙〉と〈談話の一貫性〉の関係についての一考察 記憶による指示対象へのアクセス可能性の観点から

遠山 千佳\*

## 要旨

本研究は、韓国語、中国語、英語を母語とする日本語学習者(L2)、日本語母語話者(L1)の作文を対象に、これまで文レベル(命題情報)、談話レベル(文脈)で分析されてきた助詞八の使用に、語彙レベル(意味概念)も関わっているということを質的に分析したものである。その結果、(1)「私」、一般の人々を意味する語彙、政府関係の語彙は、L1かL2学習者か、またL2学習者の母語にかかわらず、作文に初めて導入されることから助詞八によってマークされていること、(2)母語における談話の流れや命題情報の在り方が語彙の表現(主題か非主題か)に関与していること、(3)トピック・マーカの使用が有標である母語(英・中)のL2学習者は、主題か非主題かということより、語彙の意味概念に依存して談話の一貫性を成り立たせる傾向があることが示された。これらには言語共同体によって共有された文化フレームが影響していることが示唆された。

---

\* 立命館大学 大学院 言語教育情報研究科准教授

## 1. はじめに

外国語を勉強していて、いくら文法的説明を受けても、使い方がわからないことがある。たとえば、“a/an”と“the”は名詞に前接するということはわかるが、いつ“a/an”を使い、いつ“the”を使えばよいかというのは、日本人の英語学習者にとって頭を悩ませる文法項目の1つではないだろうか。少なくとも筆者の場合はそうである。一般に“a/an”は不定名詞句につき、“the”は定名詞句につくと言われており、いろいろな説明を読んでも、“a/an”と“the”の使い分けをしながら文章を書いてみると、英語母語話者にことごとく反対の選択をしているというご指摘を受ける。Chaudron and Parker (1990) は、日本人英語学習者を対象に絵を見て発話させるタスクを行い、名詞句の導入のされ方を分析した結果、英語のレベルに関わらず、新しい名詞句は“a”が“(冠詞なし)”が“the”でマークされること、その時点でのトピックは主に代名詞で表現されること、既知トピックは主に“the”あるいは代名詞でマークされるというパターンが見られたとしている。これは学校で教えられている明示的知識そのものであるように思える。このような結果を Chaudron and Parker が述べているということは、これ以外の選択があることを示唆している。筆者にとって難しい項目であるが、不思議なことに「“a/an”と“the”のどちらか正しい方を選べ」という二者選択の試験問題や練習問題に出会ったことがあまりない。この理由の1つとして、“a/an”と“the”が文脈に関わっていることが考えられる。“a/an”と“the”は文レベルの命題情報だけで決まるわけではなく、話し手と聞き手の状況、世界知識、その時点で共有された知識などを含む談話レベルで語用論的に決定される文法項目であることがこれまでの筆者が指摘を受けた誤用から推測される。試験問題であまり見かけないのは、一般になされている学習者への明示的な説明が、英語母語話者の直感による語用論的な選択を説明しきれていないからではないだろうか。

日本語については、助詞ハの使い方と同じような疑問をもつ学習者は多い。助詞ハと助詞ガの使い分けは有名であるが、それ以外にも「～には～がある」と「～に～がある」はどう違うのか等、主題文と非主題文の違いについて、超級レベルの学習者からも質問が出ることもある。一般に言われている「助詞ハはトピック・マーカである」という説明が、日本語学習者にとってそれほど有効でないことは明らかである。「助詞ハと格助詞のどちらか1つを選べ」という問題も昨今はほとんどみかけない。主題とするか、非主題とするかは、その時コミュニケーションが行われている場面での話し手(書き手)と聞き手(読み手)の状況、その時点で共有された文脈などが関与した、語用論的選択が行われるため、第三者が明示的知識(ルール)により客観的に選択することは難しい。しかし、助詞ハが主題を示す機能をもつことも事実であり、主題は談話の一貫性に関与する(Langacker, 2008)ため、助詞ハの使用は談話の形態に影響を与えることになる。論理的な発話や文章には重要な助詞である。

助詞ハのように明示的知識によって説明することが難しい文法項目は、学習者はコミュニケーションなどの言語経験を通して、暗示的知識として身につけていくことが多い。特

に機能語は談話の中で果たしている機能を観察することによって本質を理解できることが多い(堀江 2004)とされている。書き手と読み手の場合も、音声をとまなわなないコミュニケーションを行っていると考えれば、助詞八のような暗示的知識の習得は、コミュニケーション行為に委ねられ、文脈に依存しながら進んでいくと考えられる。認知・機能主義言語学では、言語の習得はコミュニケーションの「現場」に照らして必要な言語形式の使用が始まり、徐々に意味をもった繰り返しとして文法を捉えていく(Hopper, 1998)と言われているが、明示的な文法説明がされることが多い第二言語教育の中で、コミュニケーションを通して習得される助詞八のような暗示的知識は、まさにこのような習得過程を経ると考えられる。本稿では、文法項目の習得がコミュニケーションを通して、文脈に依存しながら促進されるという認知・機能主義的アプローチの立場から、日本語学習者の作文を分析する。

## 2. 先行研究

前章で最初に述べた“a/an”と“the”、つまり不定と定の問題について、Givón(1998)は、どのような条件のもとで聞き手が指示対象に到達する(「アクセス可能性」と話し手が想定できるのかという指示対象へのアクセス可能性が、3つの主要記憶システムに依存しているとしている。3つの記憶システムとは、共有された文化フレームによって成り立つアクセス可能性(恒常的意味記憶)、その時点で共有された談話によって成り立つアクセス可能性(エピソード記憶)、共有された発話状況によって成り立つアクセス可能性(作業記憶、現在の注意の焦点)である。

の恒常的意味記憶は、文化的に共有された一般的な語彙知識として、心の中に表彰されているとされている。この記憶は、同じ言語共同体であれば、いつでもアクセス可能な指示対象である。Givónは、すべての人間(共同体の1つ)にとってアクセス可能な指示対象として“the sun”、宗教的共同体にとってアクセス可能な指示対象として“the Gods”などを挙げている。しかしGivónは、1つのルールで“the”の使用が決められない例も示している。Givónは、指示対象への一般的アクセスが、しばしばエピソード的な談話に基づいたアクセスと共に、対象を二重に確立する混成的なシステムをとっているという。つまり、一般的語彙の知識と、談話が表わすエピソード表象中の残存知識との照応関係の、両者によって指示対象へのアクセス可能になるという。このように二重に確立するタイプの指示対象が「フレームに基づいた指示」である(Givón, 1998)。(1)、(2)はその例の一部である。

(1) My boy missed *school* today, he was late for *the bus*.

(2) She went into a *restaurant* and asked *the waiter* for *the menu*.

Givónの説明によると、(1)の“the bus”は、先行文脈に“school”があるというエピソード記憶、“school”のフレームの下位に「スクールバス」があるという一般的語彙知識(恒常的

意味記憶)の2つの異なる記憶に基づいて定名詞の表現がとられている。(2)の“the waiter”と“the menu”も同様に、先行文脈の“a restaurant”(エピソード記憶)とrestaurantのフレームの下位に“waiter”と“menu”があるという一般的語彙知識から定名詞としての表現となっていると説明されている。

このことは、ある名詞句(指示対象)に“a/an”と“the”のどちらがつくか選択する際、その指示対象が先行文脈に存在するか否か、共同体の誰でもがアクセス可能かどうか、だけではなく、フレームに基づいて選択しなければならないことを示している。フレームは世界知識の1つであり、その言語が使用されている地域の文化が大きく関わっている。

のエピソード記憶は、指示対象が聞き手にとってその時活性化しているかどうかにかかわる。Chafe(1987, 1993)は、聞き手にとっての情報の活性化状態として、「既に活性化している」情報(active concepts)、「まだ活性化していない」情報(inactive concept)、長期記憶の中から喚起することが可能な「準活性化(semi-active concepts)」状態の情報を提言し、談話のトピックについて述べている。Chafeによると、活性化および準活性化されている情報はトピック化できる情報であるが、不活性化状態の情報はトピック化されにくいとしている。不活性化状態の情報が突然トピック化された場合は、聞き手(読み手)の理解に支障が生じたり談話の一貫性や結束性が途切れたりすると考えられる。このような情報の流れ(information flow)の概念は、話し手(書き手)と聞き手(読み手)の間で心的に何が起こっているかを、静的な文の分析ではなく、認知的プロセスとして動的に展開していくものとして捉えること(Chafe, 1987)を可能にする。Givón(1998)は、文脈内のエピソード記憶によるアクセス可能性の程度によって、指示対象を表す文法手段が異なるとし、前方ゼロ照応、前方照応代名詞、強勢のある代名詞、不定名詞、定名詞、制限的關係節をともなった定名詞を挙げている。そして指示対象の活性化状況がこれらの表現の使用を選択しているとしている。また、ときには、活性化していない情報でも定名詞を使用することで、聞き手に指示対象を探索するよう合図するとしている。

このことは、談話の文脈が指示対象の表現形式に関与し、逆に指示対象の表現形式もこれから続く談話の文脈に影響を与えるというように、相互作用していることを示している。

の作業記憶、現在の注意の焦点としてGivón(1998)が述べているのは、主に直示表現である。発話状況によって、I, you, here, thereの指示するものが変化するというものである。

“a/an”と“the”の使い分けと、日本語の主題を示す助詞ハと非主題の使い分けは、違う機能の使い分けであり、単純に比較はできないが、どちらも指示対象の表現形式の一種であること、話し手(書き手)と聞き手(読み手)の状況やその時点で共有した文脈が関わることなど、共通している点もある。上記、～の記憶とのかかわりについて考えると、

については、日本語の主題表現である助詞ハ、前方ゼロ照応などについて、従来、国語学や日本語学でも、文レベルや談話レベルで、情報との関係から論じられてきた(久野1978など)。については、時制や話法がかかわるが、主題表現にはそれほど関与していないと

考えられる。 の指示対象を二重に確立するというアクセス可能性は、助詞八の使用が 1 つのルールだけで説明できないこととも関わりがあると考えられる。また助詞八は従来、新情報・旧情報という文脈との関わりや、述語のタイプとの関係という命題情報に関わる分析は行われてきたが、語彙のもつ意味概念やそのフレームとの関係はほとんど分析されていない。助詞八でマークされる語彙は、どのように認識され、助詞八でマークされるのだろうか。また、どのような語彙の意味概念が助詞八でマークされ、談話の一貫性に影響を与えるのだろうか。

### 3. 本研究の目的

先行研究の概観から、Givón (1998) の提示した 3 つの主要記憶システムのうち、 による、どのような語彙の意味概念が共有された文化フレームによって助詞八でマークされるのか、という課題について、日本語学習者の作文を対象に観察を行い、分析する。作文を対象にするのは、助詞八の使用については、日本語母語話者でさえ文脈を遡及的に吟味することがあることと、その場で消えてしまう発話より書かれたもののほうが、論理的に話を運ぶ意図が含まれると考えたからである。

Chafe (1987, 1993) による「活性化情報」は、既に先行文脈に導入されている指示対象であり、助詞八で受けることができる可能性が高いことは、学習者にもわかりやすい。しかし、先行文脈に導入されておらず活性化されていないが、聞き手(読み手)はおそらくすぐに記憶から探索することができると話し手(書き手)が想定する、「準活性化状態の情報」としての指示対象は、日本語が母語でない学習者、つまり異なる言語共同体に属する学習者にとっては、想定が難しいかもしれない。サークルやクラスメートなど、小さく親密な共同体の中では、異なる言語共同体に属していても、想定しやすい準活性化情報はありと考えられるが、作文のように自分の知らない人が読む談話・テキストにおいては、「準活性化情報」を想定しにくいのではないだろうか。あるいは、言語に関わりなく普遍的なものがあるのだろうか。

そこで本研究では、日本語学習者の作文を対象に、作文に初めて導入される際に、助詞八でマークされる語彙は、どのような意味情報をもつ語彙か調査を行った。またその際に、主題と非主題の関係がわかりやすくなるよう、最も主題化されやすいと考えられる主語に焦点を絞った。本調査により、L2 学習者がどのような語彙を助詞八によってマークする傾向があるかを探り、日本語教育への示唆を得ることを目標とする。

## 4. 分析方法

### 4.1 データ

データは「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース(略称

「作文対訳 DB<sup>1</sup> ( 国立国語研究所作成 )」から、日本語学習者の母語として多い、韓国語、中国語、英語を母語とする執筆者の日本語作文を分析対象とした。また、ベースラインとして、日本語母語話者による作文の分析も行った。「作文対訳 DB」に収録されている作文は、いくつかの設定されたテーマについて書かれている。本研究ではその中で、「あなたの国の行事について」というテーマについて書かれたものを抽出し、分析を行った。このテーマは、子どもの頃から現在まで心に深く刻み込まれた題材であり、順序性 ( 時系列性 ) のある経験を述べたものであるため、執筆者にとっては内容的に認知的負荷が低いと考えられる。

作文数は中国語母語話者 43 本、韓国語母語話者 43 本、英語母語話者 22 本、日本語母語話者 22 本で<sup>2</sup>、全て母語が話されている国で採集されたものである。作文執筆者には母語以外の言語を話す者もいるが、対訳作文を母語と同じ言語で書いている対象者のみを抽出している。作文の長さは平均文字数にすると、中国語母語話者 644 文字、韓国語母語話者 612 文字、英語母語話者 474 文字、日本語母語話者 682 文字である。分散分析の結果、中国語母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者の作文の長さ ( 平均文字数 ) に差は見られなかった ( $P=0.08$ ,  $F=1.8$ )。しかし、英語母語話者の作文の平均文字数は、中国語母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者の平均文字数とは 5% の水準で有意な差が認められ ( 英中 : 自由度 63 ,  $t=2.00$ ; 英韓 : 自由度 63 ,  $t=2.00$ ; 英日 : 自由度 21 ,  $t=2.08$  )、英語母語話者の作文の平均の長さは他の母語の L2 学習者の作文より有意に短い。また本研究において対象とした英語母語話者の作文では、平均文字数が他の母語話者の作文より有意に少ないだけでなく、漢字の使用が少ないこと、複文の使用が少ないことから、対象とした中国語母語の執筆者、韓国語母語の執筆者は、英語母語の執筆者より日本語能力レベルが高いと考えられる。

## 4.2 分析方法

主語は、主語マーカーである助詞ガ、とりたての助詞ハあるいは助詞モでマークされるのが一般である。助詞モでマークされる場合は、対象となる語と共通の意味要素をもつ語彙が先行文脈、あるいは読み手の記憶に存在していることが前提となり、それを示すことが主な機能となる。本稿では、語彙の意味概念と談話の一貫性の関係を調査するため、主語に焦点を絞り、助詞ハでマークされている語彙を調査対象とした。

まず、対象とした作文から、主語<sup>3</sup>のうち、1 つの作文内に初めて導入された語彙を助詞ハがマークしている場合を全て抽出した。語彙としては違っていても、同一指示物を指す場合は、1 つのものとして扱った。ただし、以下の場合を対象から除いた。( ) はその理由である。

- ・「行事」、及び題名に含まれている語彙。( 作文を書き始める時点から、テーマとして意識されていることが明らかである。 )
- ・指示詞 ( ex. これハ ) 及び指示詞 + 名詞句 ( ex. この祭りハ )。( 指示詞は先行文脈との結

束性が強く、探索しやすいことが明らかである。)

- ・否定形の文の主語。(否定される語彙を助詞八でマークするという文法的制約が関わる可能性がある。)
- ・名詞修飾節内の主語、従属節内の主語で主節と異なる主語。(文法的制約が関わる可能性がある。)
- ・引用句内の主語名詞句。(引用部分が前後の文脈とは異なる文脈における談話である。)
- ・修飾語がある語彙。(修飾語によって、指示対象を明確にできるため、記憶の探索をする必要が少なくなる。)

その後、抽出した語彙が談話に初めて導入される際に助詞八でマークされる頻度(作文数)を算出し、その結果とそれらの語彙の文脈との関係から、L2 学習者がどのように初導入の主語名詞句を助詞八でマークしているか分析した。その上で、語彙が談話の一貫性にどのように影響を与えるかを考察した。

## 5. 分析結果と考察

### 5.1 初出時に助詞八でマークされた語彙

まず、ベースラインとする日本語母語話者の作文において、初めて文脈に導入される際に助詞八でマークされた主語名詞句とその頻度(作文数)を表1に示し、その傾向を大まかに概観する。対象となる語彙が初導入されるのは、1つの作文につき1回のみであるため、頻度は作文数を表している。頻度1(1つの作文のみに現れたもの)は、語彙の意味概念がわかりやすくなるよう、便宜上、有生と無生に区別した。

表1. 日本語母語話者の作文中、初導入時に助詞八でマークされた語彙とその頻度

語彙(意味概念)	頻度(全22)
私	5 (23%)
子ども、人々	4 (18%)
日本人、祖母	3 (14%)
私たち、お母さん、女性	2 (9%)
<有生> 祖父、叔母、昔の人、未成年、星の王子様、男性、死者、生ける者 <無生> 様式、郵政省、メイン、祭り、本番、母の実家、日本文化、交通機関	1 (5%)

頻度2~5の語彙は全て有生であり、「私(執筆者)」とその家族、または「人々」や「日本人」、「女性」などの人々一般を意味する語彙である。頻度1の語彙になると、「祖父」

や「祖母」などの家族があるものの、一般性はやや落ちる。「郵政省」は政府機関の固有名詞である。

次に、韓国語を母語とする執筆者による作文において、初めて文脈に導入される際に助詞ハでマークされた主語名詞句とその頻度（作文数）を表 2 に示す。韓国語はトピックと主語の両方が卓立している言語であり（Li & Thompson, 1976）、類型論的にも、トピックの表現に助詞のような形態的手段を使うという点においても、日本語に近い言語である。

表 2. 韓国語母語話者の作文中、初導入時に助詞ハでマークされた語彙とその頻度

語彙（意味概念）	頻度（全 43）
男性	6 (14%)
女性	5 (12%)
私	4 (9%)
母、子ども、韓国人、主催者側	2 (5%)
< 有生 > 私たち、おじいさん、人々、大人、若者、後孫、祖先、新郎、新婦、 卒業生、恋人たち、 < 無生 > 韓国、家庭、函、婚書、交通、釜山国際映画祭、変化、（特定の日付）、 きのう、秋夕	1 (2%)

頻度 2 以上の語彙は、日本語同様、有生名詞のみであり、執筆者である「私」と家族のほか、一般を意味する「男性」「女性」「韓国人」が含まれる。「主催者側」というのは結婚式の主催者である新郎新婦を指しており、一般性はやや低い。頻度 1 の語彙のうち、有生のものは、家族や身近な人々を指すものである。無生のほうでは、行事の名前を指す固有名詞（「釜山国際映画祭」「秋夕」）が助詞ハで導入されている。また、「函」「婚書」のような日本語ではなじみのない語彙も助詞ハでマークされて導入されている。日本語母語話者との類似点としては、韓国語母語話者の作文では「変化」、日本語母語話者の作文では「様式」「メイン」という抽象的な語彙が使用されている。これらは、先行する文脈を受けるものであり、それぞれの語の前に「～の」という修飾語が省略されていると考えられる。

(3) (韓国の子どもたちがお盆の時にする遊びについて書かれている。) ~ また、牛を互いに対面させてけんかをするようにする牛けんかがある。そして女達が丸く輪を作って踊って、その踊りに合わせて歌うこともある。しかし、今はこのような遊はほとんどしない。時間が流れながらすこしずつ変化はあるがその意義はそのままだ。(KR-80)

(4) 日本の祭りの多くは農業国という事もあって豊作を祈願した李、家庭の安全を祈っ



たりと願掛け的なものである。また神への感謝としての「祭り」など全国各地ならではのものが存在する。その地域ごとに様式は異なり、独自の衣装や慣習を楽しむ事も祭りの楽しみ方の一つであると思う。(JP-10)

(3)では、「(遊びの)変化」、(4)では「(祭りの)様式」を意味する。これらは、「遊び」や「祭り」の下位フレームである。「変化」も「様式」も作文内では比較的長い文脈で語られている。

また、「交通機関/交通」が、韓国語母語話者の作文、日本語母語話者の作文ともに、初導入の際に助詞ハでマークされている。「交通機関」は現代社会でなくてはならない存在であり、誰でもアクセス可能と判断されたと考えられる。

続いて、類型論的にトピックが卓立する(Li & Thompson, 1976)と言われている中国語を母語とする執筆者の作文中、初めて文脈に導入される際に助詞ハでマークされた主語名詞句とその頻度を表3に示す。中国語のトピックは語頭に置かれ、語順によって文法的に表わされるのが無標である(野田 2004)とされている。

表3. 中国語母語話者の作文中、初導入時に助詞ハでマークされた語彙とその頻度

語彙(意味概念)	頻度(全43)
人々	17 (40%)
私	11 (26%)
(特定の日付)	10 (23%)
大人、中国人、若者	4 (9%)
中国、花婿、両親	3 (7%)
子ども、南方の人、農民、親戚、家族の皆さん、家々、族(民族)、大学生、餃子、天安門広場、(特定の年)、お年始回り	2 (5%)
<有生> 私たち、父、母、姉、妹、兄嫁、息子さん、家の人たち、花嫁、主婚人、許婚人、仲人、騎手、儀仗隊、軍隊、人民代表、司会者、政府の指導者、主婦、観客、北方の人、男の子、女の子、華僑、日本人、ある人、 かささぎ、魚 <無生> 時間、除夜、次の日、頭、顔、手、人々の心、北京、月餅、団子、月、空気、大砲、企業、廟会、お客さん、楽隊、老人、準備工作、消費量、侵略戦争、視聴率、歴史、ふるさと、形式、種類、内容、場面、中心、東側、西側、節日気雰、中秋節、冬至、余り	1 (2%)

中国語母語話者の作文において、文脈への初導入時に助詞八でマークされた語彙は、その頻度から4つに分けられる。1つ目は40%（17作文）の作文に用いられた「人々」である。「人々」は日本語母語話者、韓国語母語話者の作文においても、共通して初導入時に助詞八でマークされており、人々一般を意味する語彙である。

次に頻度が多いのは、「私」と「12月30日は」のように特定の日付を表す場合である。「私」は日本語母語話者、L2学習者の母語に関わらず、高い頻度で初導入時に助詞八でマークされている。「私」は作文執筆者を意味し、作文の読み手が作文を読んでいる以上、常に書き手として存在しているため、最初から談話全体に関わる語彙として認識されていると考えられる。

一方、中国語母語話者の作文において、特徴的であった主語の1つは、特定の日付であり、それらが助詞八でマークされている。(5)(6)はその例である。重要な日付をテーマとして談話に導入する談話形式となっている。日本語母語話者の作文にも日付は作文の最初に導入されることがあったが、(7)のように副詞的な表現がとられるなど、主語としては表現されていない。中国語母語話者の作文では、重要な日付が主語として導入され、その後その日付がなぜ重要かが述べられていくというような談話の形式になっている。

(5)(作文の最初) 十月一日は、私たちの国の国慶節です。今年の十月一日は、五十年の国慶でした。中国にとって、たいへん重要な節日でした。(CN-078)

(6)(作文の最初) 中国では、農歴の一月一日は春節です。それは中国の一番重要なきせつです。(CN-072)

(7)(作文の最初) 日本には三月三日に「ひな祭り」という行事があります。また、五月五日には「子供の日」というのがあり、この日は主に男の子の健康と成長を願う日であるのに対し、ひな祭りは女の子のための行事です。(JP-14)

続いて、頻度3~4の語彙は、「大人」「中国人」「若者」のように主に人々一般グループを意味している。その他、国名の「中国」がある。これらは一般的語彙知識としてアクセスしやすい語彙である。頻度1~2は、有生では家族、親戚のほか、職業を表す語彙、他国人(日本人)を指すもののほか、「かささぎ」「魚」のような動物も初導入の時点から助詞八でマークされている。無生では、食べ物、「人々の心」のような抽象的なもの、「北京」「中秋節」のような固有名詞など、さまざまな意味概念をもつ語彙がある。このようにさまざまな意味概念の主語が助詞八でマークされている原因として、中国語母語話者の作文では、43作文のうち11作文(26%)において、主語は全て助詞八でマークされていることがある。中国語はトピック卓立型の言語で、トピック化の手段としてトピックが文頭に置かれるが、主語も文頭に位置することから、主語とトピックの区別がつきにくい(野田

2004)と考えられる。その影響が助詞八の使用に現れた可能性がある。(8)は、初めて談話に導入された主語が助詞八でマークされることが最も多かった作文の一部である。

(8) タイトル〈国慶〉 一九九九年は中国として尋常でない年です。中国は一九四九年から一九九九年まで五十の春秋をたちました。五十年の辛苦をなめつくして、今日についてきました。今年、十月一日は中国の五十年の独立記念日。

十月一日は、国民がみんな一緒に特殊の日をお祝いしました。北京は中国の首都として、とくに賑やかかったです。今日、天安門は世界の焦点になりました。

天安門広場は節日の気氛につつまれていました。午前、大型で閲兵儀式を挙行しました。まず、旗手は国旗けいようしました。国旗は輝かしい光がかががついて、中国の輝煌を示します。それから儀仗隊はすばらしい表演をしました。そして軍隊と人民代表は天安門をあるいて～(続く) (CN-074)

(8)では、中国での固有名詞を含むトピックが次々に変わっていく。一見、その変化はめまぐるしいように見えるが、実は、語彙の意味概念によって、結束性が保たれている。まず「一九九九年」と「十月一日」は、同じ独立記念日の「時」を示し、〈年〉という大きい指し方から〈日付〉へと絞った指し方がされている。次の段落も「北京」と「天安門(広場)」はどちらも国慶節の行事が行われた場所を示し、やはり大から小へと視点が絞られている。3段落目は初導入の3つの主語が助詞八でマークされているが、全て「閲兵儀式」の下で行われることであり、「閲兵儀式」の下位フレームであるといえる。日本語母語話者の作文では、初導入される主語が助詞八でマークされる場合が限られており、そうすることでトピックの一貫性を表現することができた。中国語母語話者の作文では、その意味内容で結束性を保つというストラテジーに成功している。つまり、日本語の助詞八によるトピック化の談話システム(命題情報と談話の関係)を習得していなくても、それに代わる機能を語彙の意味概念を利用して行っていることになる。Givón(1979, 1995, 1998)は、前文法的談話(Presyntactic discourse)では、テキストの一貫性を確立するために、実質的な内容をもった語彙が手がかりとして供給されるとしている。すなわち、語彙の意味概念が、談話の一貫性を確立するための文法コードの代替として語用論的に活用されていることを意味している。助詞八の使い方がまだ完全に習得されていないと考えると、この理論を支持していると考えられる。

最後に、英語母語話者の作文において、文脈への初導入時に助詞八でマークされた主語名詞句とその頻度を表4に示す。英語は類型論的には、主語卓立言語であり(Li & Thompson, 1976)、無標のトピックの表現手段は音声である(野田 2004)とされている。

表 4. 英語母語話者の作文中、初導入時に助詞ハでマークされた語彙とその頻度

語彙 (意味概念)	頻度 (全 22)
私	4 (18%)
みなさん、家族、(特定の日付)	3 (14%)
父、アメリカ人、花婿、花嫁、学生	2 (9%)
< 有生 > 私たち、母、祖母、司祭、牧師、せい教徒、女の人、男の人、友達、 先生、大人、子ども、シンガポール人、アメリカの原住民、独身の人、 < 無生 > ケーキ、写真、学校、勉強、クリストきょう、カソリック、ユダヤきょう、 人口、連邦政府、シンガポール政府、旅行促進局、中国、祝賀、 祝い方、晩餐会、かんしゃさい	1 (5%)

英語母語話者の作文中、初導入時に助詞ハでマークされた主語として、最も頻度が高かったのは「私」である。これは先述したように、全ての母語話者の作文において同じ傾向が示された。続いて、「みなさん」「家族」という人々一般、家族を意味する語彙、及び特定の日付である。特定の日付の頻度が高いのは中国語母語話者の傾向と似ている。その後、「父」「アメリカ人」のようにやはり家族や人々一般を意味する語彙が続く。頻度 2 以上の語彙は、特定の日付を除き、全て有生である。

しかし、頻度 1 の語彙の意味概念はさまざまである。有生のものは家族、一般、職業などを意味する語彙が含まれ、無生は、「連邦政府」「シンガポール政府」「旅行促進局」のような政府や政府関係を指す語彙、「感謝祭(かんしゃさい)」「ユダヤ教」のような固有名詞のほか、「ケーキ」のような一般的な名詞も含まれている。その理由の一つとして、中国語母語話者の作文同様、英語母語話者の作文においても、22 作文のうち 7 作文(32%)では、主語名詞句が助詞ハによってのみマークされている。英語は主語卓立言語で、トピックは音声という目に見えない手段で表現されることが多いため、主語とトピックの区別がつきにくい。八木(2000)では、フォローアップインタビューとして、学習者に「は」の説明を求めたところ、“subject”が最も多く、“subject”と“topic”の違いは顕在的な陳述知識として認識されていなかったとされ、「は」が主語であり主題である文成分をマークすると認識しているようであると分析されている。

(9) は、助詞ハがトピックを表すと考えると一貫性が低いように思えるが、英語のようにイントネーションがトピックを表すと考えると、一貫性が出てくる。

(9)(作文の最初) 今、私の家はマサチューセッツ州でハーバードと言う町に住んでおります。とても小さくて、静かな町です。人口は五千人だけです。(US-5)

下線部が初導入で助詞八によってマークされた主語である。日本語の文法で考えると、この部分が主題（トピック）である。しかし第2文目の省略された主語は「ハーバードという町」であり、家族についてはそのあとの部分で述べられることはもうない。第2文目のように主語が省略された場合、それは前方ゼロ照応であり、先行文脈と結束性の強いトピックであることを表す。(9)では、「ハーバードという町」にイントネーションをおき、トピック化していると考えれば自然な談話となる。このように、(9)も語彙の意味概念に加え、想定される音声に依存して談話の一貫性を確立しようとしていることがうかがわれる。

## 5.2 共通点と相違点

日本語において、初めて談話に導入されることから助詞八でマークされるということは、先行文脈に出現していなくても読み手の記憶から活性化できると書き手が想定しているということを意味する。これは Chafe(1987, 1993)の準活性化(semi-active)情報にあたる。

本研究の分析結果では、日本語母語話者がL2学習者かにかかわらず、またL2学習者の母語にかかわらず、「私」という語彙が初導入時に助詞八でマークされる頻度が高かった。「私」は執筆者であり、先行文脈に出現していなくても準活性化情報であるといえる。しかし、L2学習者が必ずしもそのように把握しているとは限らない。「私八」というチャンクとしてのインプット量が影響している可能性、日本語教育の教室で「私は苗族人です(CN-080)」のような自己紹介型の「私は～です」という形が初めに導入されるため、その形が定着しているインストラクションの影響の可能性など、要因はいくつか考えられるが、いずれにしても、L2学習者がこれまでのコミュニケーションを中心とした言語経験から習得していると考えられる。「私」の指示対象は執筆者であることは明確であり、読み手が「私」の指示対象の探索に迷うことはなく、助詞八でマークされることが適切な使用として繰り返し経験されてきたと考えられる。

「私」以外に共通する語彙としては、「人々」「人」などの一般の人々を意味する語彙が、初導入時に助詞八によってマークされていた。これらの語彙は周囲に常に存在する概念であり、準活性化情報として読み手に活性化されやすい概念である。L2学習者は「私」と同様、これまでの言語経験から、これら人々一般を意味する語彙が談話への初導入時から助詞八で導入可能であることを習得していると考えられる。

また、家族を表す語彙についても、頻度は下がるが、どの母語話者の作文にも初導入で助詞八によってマークされるものが見られた。しかし、「私」や一般の人々を意味する語彙とは、状況が異なっている。まず、日本語母語話者の作文では、主語が物事や事柄などの状況となることが多く、動作主が主語となることが少ない。したがって、家族が主語として現れ、かつ助詞八でマークされることは少ない。それでもいくつかの家族を表す名詞が初導入の際に助詞八でマークされているということは、一般的にアクセス可能な語彙概念として認められていることを示している。

一方、中国語母語話者の作文では、誰が何をしたかという記述が多く、「誰が」の部分に家族が多く出現している。家族が多く出現しているのは、テーマが自分の国の行事であり、行事には伝統的なものが多く、家族が関わっていることが多いからである。中国語母語話者の作文に「人々」が多いのも「誰が」を明記していることが理由の1つである。このように、「誰が何をしたか」を思考の中心とする談話の流れと、日本語母語話者の作文のように状況説明を思考の中心とする談話の流れの違いが「誰が何をマークするか」の違いに関与していると考えられる。英語母語話者の作文も「誰が何をしたか」中心であった。このことは、語彙の意味概念が談話のパターンに影響を与えるだけでなく、談話のパターンが語彙の使用に関与していることも示唆している。

語彙そのものは違っているが、政府あるいは政府関係の語彙が、英語母語話者（「連邦政府」、「シンガポール政府」、「旅行促進局」）、中国語母語話者（「政府の指導者」、「軍隊」など）と日本語母語話者（「郵政省」）の作文から抽出された。英語母語話者の作文に見られた政府そのものの他、「政府」というフレームの下位にあると考えられる部署や政府関係者が助詞「で」でマークされている。どの国にも政府は存在し、政府には下位組織があるという一般的知識から、初導入でも助詞「で」でマークされることが多いと考えられる。

執筆者の母語による違いとしては、トピックの表現方法として日本語の助詞のような形態的手段が有標であり、言語類型論的にもトピックか主語のどちらか一方だけが卓立する型である、中国語母語話者と英語母語話者の作文では、さまざまな語彙が初めて談話に導入される際に助詞「で」でマークされていた。しかし、中国語母語話者の作文では次々に助詞「で」でマークされて提示される語彙が、大きな焦点から小さな焦点への絞り込みであったり、共通したテーマの下位概念が続いて提示されていたりするなど、助詞「で」という文法的手段ではなく、語彙の意味概念、つまり文脈に依存した結束性、一貫性を保持していた。英語母語話者の作文には更にその傾向が強いものも見られ、母語のトピック表現に近い方法で談話の一貫性を保持していた<sup>4</sup>。このような語彙の意味概念や文脈に依存して結束性や一貫性を生み出すストラテジーによって、助詞「で」でマークする語彙を次々に提示しても談話の一貫性が失われないようにすることを可能にしている。しかし、談話の一貫性を成り立たせるために助詞「で」のような文法的機能を言語処理に使用することにより、語彙と文脈的手がかりが担っている機能的な負荷を減らし、自動処理をスピードアップすることができる（Givón, 1998; 杉浦 2007）と考えられる。

### 5.3 分析結果のまとめ

本研究から、語彙の意味概念が談話レベルのトピック化に関与し、談話の一貫性に関わっていくことが示唆された。また逆に、談話の一貫性が指示表現に影響を与えることも示唆された。これまでトピック化は、文レベルの命題情報、あるいは談話レベルで別々に分析されることが多かったが、本研究では、語彙レベルでの意味概念が助詞「で」の使用にかかり、談話のパターンに影響を与えていることが示されたことになる。また、意味概念の

捉え方には、共有された文化フレームが影響していることも示唆された。

語彙の意味概念がどのようにトピック化による談話の一貫性に影響を与えるかについては、日本語母語話者と L2 学習者の間、また L2 学習者間に、共通点と相違点が見られた。相違点については、L2 学習者の母語のトピック化の手段や言語類型が影響を与えている可能性がある。また L2 学習者の作文には談話の一貫性を保持するための語彙の意味概念によるストラテジーが見られた。

## 6. おわりに

談話の一貫性に関わるトピック化には、さまざまな文脈条件に関わるが、L2 学習者の場合は、更に母語の影響も条件として加わる。複数の条件は複合的に影響しあうため、助詞八によるトピック化のルールは一言で明示的に説明することは難しい。従来、1 つのルールだけで説明しようとしては反証が出たり、助詞八は語用論的な運用に基づくため言語使用者により助詞八の機能としてイメージしていることが違ったりするなど、L2 学習者への説明はどれも反故になっていた感がある。最近では、助詞八は暗示的知識なので説明するだけ無駄であるというような声も聞こえる。これは、これまで文レベル、談話レベルと分けて考えられていたため、そこに相互作用があることが見逃されていたことが原因のひとつであると考えられる。本研究では、更に語彙レベルも文レベル(命題情報)、談話レベル(文脈)と相互作用し、助詞八の使用に語用論的に関与していることが示唆された。しかし、逆に語彙の意味、命題情報、談話の条件が競合する場合もあると考えられる。今後、そういう場合も、コミュニケーションとしての動機づけとともに分析していきたい。

## 注

1. 国立国語研究所日本語教育基盤情報センターが作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース / 日本語学習者による日本語発話と、母語発話との対照データベース / 作文添削システム XECS」を利用した。
2. 中国語母語話者、英語母語話者及び日本語母語話者の作文は、DB 中の対象作文全てである。韓国語母語話者の作文は数が多かったため、最も作文数の多い中国語母語話者の作文と同数をランダムに選出した。
3. 正確にはガ格の語彙を抽出した。ガ格には、主語のほか、対象を表わす目的格(久野 1973)があるとされているが、実際には、主語と目的格の境界は曖昧である(特に、所有の「～がある」など)。そのため、本研究ではガ格全てを調査対象とした。
4. 英語母語話者に文脈依存の傾向がより強く現れたのは、日本語能力レベルも関係していると考えられる。

## 参考文献

- 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
- 杉浦まそみ子(2007)『引用表現の習得研究 記号論的アプローチと機能的統語論に基づいて』ひつじ書房
- 野田尚史(2004)「主題の対照に必要な視点」, 益岡隆志編『主題の対照』東京: くろしお出版, 193-213.
- 堀江薫(2004)「談話と認知」中村芳久編『認知文法論』大修館書店, 247-278.
- 八木公子(2000)「「は」と「が」の習得 - 初級学習者の作文とフォローアップインタビューの分析から」『世界の日本語教育』10, 91-107
- Chafe, Wallace L. (1987). Cognitive constraints on information flow. In: Russell S. Tomlin(Ed.), *Coherence and grounding in discourse*, 21-51. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Chafe, Wallace L. (1993). Prosodic and functional units of language. In: Jane A. Edwards and Martin D. Lampert (Eds.), *Talking data: transcription and coding in discourse research*, 33-43. NJ: Lawrence Erlbaum associates.
- Chaudron, Craig & Kate Parker (1990). Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrases, *Studies in Second Language Acquisition*, 12: 43-64.
- Givón, T. (1979). *On understanding grammar*, Florida: Academic Press.
- Givón, T. (1983). Topic continuity in discourse: an introduction. In: T. Givón (Ed.), *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study*, 5-41. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Givón, T. (1995). *Functionalism and grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. (1998). The functional approach to grammar. In Michael Tomasello (Ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Linguistic Structure*. NJ: Erlbaum. (山泉実(訳)(2011).「文法への機能主義的アプローチ」トマセロ(編)『認知・機能言語学 言語構造への10のアプローチ』研究社)
- Hopper, J.P. (1998). Emergent Grammar. In Michael Tomasello (Ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Linguistic Structure*. NJ: Erlbaum. (大堀壽夫(訳)(2011).「創発的文法」トマセロ(編)『認知・機能言語学—言語構造への10のアプローチ』研究社)
- Langacker, Ronald W. (2008). *Cognitive grammar: a basic introduction*, New York: Oxford University Press. (山梨正明(監訳)(2011).『認知文法論序説』東京: 研究社)
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976). Subject and topic: A new typology of language. In: Charles N. Li (Ed.), *Subject and topic*, pp.457-489. UK: Academic Press.